

内 科

副院長 北 和彦

診療局長 齋藤 博文

統括部長 野本 裕正

1. 令和4年度の目標

総合内科と救急科の連携の継続：救急医療・地域医療への貢献と初期研修の充実
専門診療の継続：消化器、循環器、糖尿病内分泌の専門診療の提供

2. 診療体制

外来診療は内科新患、消化器、循環器は月から金の週5日、糖尿病は火水木金の週4日、内分泌は火曜、神経内科は水曜、呼吸器内科は月木の週2日、外来診療を行った。脳神経内科と呼吸器内科は千葉大から非常勤医を派遣して頂いた。

入院診療と日当直は常勤スタッフ15名で分担した。日当直では千葉市夜間内科系救急2次当直を月4回程度、ならびに休日2次日直を月1回担当した。

3. スタッフ

副院長	北 和彦	(消化器)
診療局長	齋藤 博文	(消化器・総合内科)
消化器内科統括部長	野本 裕正	(消化器)
糖・代謝内科統括部長	小林 一貴	(糖尿病・総合内科)
循環器内科統括部長	宮原 啓史	(循環器)
部長	長谷川 敦史	(循環器)
部長	太和田 勝之	(消化器)
部長	川名 秀俊	(糖尿病・総合内科・救急科)
部長	市本 英二	(循環器)
医長	加藤 真優	(総合内科・救急科)
医長	薄井 正俊	(消化器・総合内科)
医長	高城 秀幸	(消化器)
医長	小林 隆広	(循環器)
医師	田澤 真一	(消化器)
専攻医	松原 良樹	(消化器)

令和4年3月で循環器内科小永井医師が退職され、同年4月より小林隆広医師が赴任された。専攻医は現在千葉大内科専門医プログラムのローテーションとして派遣されているが、關根優医師が千葉大学に戻り、済生会習志野病院より松原良樹医師が派遣された。以上により4月には常勤医14名+専攻医1名の体制で診療を開始した。

4. 診療実績

年間の新規入院数は内科全体で 2206 名（月平均 183 名）であった。部門別では総合内科 392（昨年 682）名、消化器内科 1090（昨年 1167）名、循環器内科 723（昨年 546）名であった。令和 4 年は新型コロナ肺炎の蔓延で診療制限がかかる中、当院は新型コロナ肺炎患者を受け入れつつも、感染対策を行いながら並行して通常診療を継続した。

新型コロナ肺炎患者は第 1 波から入院の受入を行い、令和 4 年度は合計 273 名（成人:167 名（妊婦:14 名）、小児:106 名）の受入を行なった。第 6 波、第 7 波、第 8 波と患者が急増したため、内科・救急科・小児科・産婦人科に加え耳鼻科、外科など総力戦で診療に当たり、重症化した患者は ICU 管理とし、救急科の協力により乗り切ることができた。

① 内視鏡統計

		令和 4 年度	令和 3 年度
上部消化管内視鏡		1509	1613
	ポリペク/EMR	7	7
	ESD	35	57
	EVL/EIS	7	7
	止血術	39	31
	PEG	17	21
下部消化管内視鏡		1787	1835
	ポリペク/EMR	637	487
	ESD	31	36
胆膵内視鏡			
	ERCP	346	255
	(EST)	84	84
	EUS	104	62
	(FNA 関連)	10	8
気管支鏡		0	0
合計		4529	4503

② カテーテル統計

		令和 4 年度	令和 3 年度
心臓			
	CAG	326	485
	PCI	277	230
末梢血管			
	PTA	14	4
	IVC フィルター	4	6

腹部		
TACE	3	9

③ 手術統計

		令和4年度	令和3年度
ペースメーカー手術			
	新規植込み術	36	34
	交換術	18	19
植え込み型心電モニタ		5	1

5. 令和4年度の総括

総合内科は昨年同様6名（斎藤、小林、川名、薄井、加藤、田澤）で初期研修医とともに診療を行った。救急科からの受け入れ体勢も順調に進み、総合内科入院392名であった。平日は毎朝8:20に診療開始前にミーティングを行い、毎週木曜日16:00に研修医のカンファレンスを行って研修医の指導を行った。

糖尿病代謝内分泌内科は小林、間山、川名の3名に水曜日の糖尿病外来と金曜日の妊娠糖尿病外来を非常勤医により継続して頂いた。

神経内科は昨年同様水曜日に千葉大から非常勤医を派遣して頂き外来診療を継続した。

呼吸器内科は月曜日と木曜日に千葉大から非常勤医を派遣して頂き、外来診療を再開することが出来た。

消化器内科は、千葉大消化器内科からの専攻医の松原を加え、昨年同様計8名で診療を行った。朝回診および週2回の早朝カンファレンス（7:30から開始）、週1回、17:00から内視鏡カンファレンスを行ない、患者の検査や治療方針などを話し合った。スタッフは肝臓領域ではC型肝炎に対するDAAs（直接作用型抗ウイルス薬）やB型肝炎に対する核酸アナログを積極的に行うとともに、肝細胞癌に対する経皮的ラジオ波焼灼療法や肝動脈化学塞栓療法も引き続き同様に行ったが、一時期と比べ症例は減少した。コロナ渦ではあったが、内視鏡室の換気に留意することにより感染対策しつつ内視鏡検査を継続した。ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）は、若手の指導を行い年間66例であった。胆膵領域はERCP関連手技350例程度で増加した。

循環器内科は宮原、長谷川、市本、小林の4名で診療を行った。カテーテルインターベンション治療件数は増加しており、急性心筋梗塞など急性冠疾患に対して迅速に対応を行った。また一昨年度に導入したロータブレード治療やリードレスペースメーカー手術も順調に症例を積み重ねている。平日は毎朝病棟回診を行い、週2回早朝に心カテの読影カンファレンス、心臓血管外科と週1回の朝カンファレンスを継続し、心臓手術適応などを検討している。

専門外来として水曜に千葉大不整脈グループの非常勤医に不整脈外来を継続して頂き、アブレーション治療の相談が可能となっている。

また、2018年に丹羽公一郎先生（聖路加国際病院）により開始された先天性心疾患外来は、2020年度の心臓血管外科再開に合わせて先天心疾患診療部に発展し診療体制が充実している。

6. 今後の目標と課題

循環器内科の緊急カテ、消化器内科の緊急内視鏡など地域の急性期ニーズに応えられるように救急科との連携をよりいっそう高め機能の充実をはかる。

高齢者医療については、入り口については総合内科機能を高め充実させる。出口に関しては在宅診療部を充実させ退院支援を目指しているが、後方支援病院が少なく、退院がスムーズとはいえず、病棟運営上、大きな課題である。

また、コロナ禍も呼吸器内科常勤医が不在のまま対応せざるを得ない状況であったが、診療局長の斎藤を中心に多くの患者の診療にあたった。しかし、今後の千葉市の医療に貢献するうえで当院での呼吸器内科医不在が長期に及んでいることは非常に大きな問題であり、引き続き千葉大学への働きかけを継続する。

文責 内科統括部長 野本裕正